

聖書：ピリピ 2：1～5

説教題：他の人のことも顧み

日時：2016年12月11日（朝拝）

パウロは1章27節からピリピ人たちに対する勧めを語り始めました。「ただ一つ。キリストの福音にふさわしく生活しなさい。」 前回触れましたように、「生活しなさい」という部分には印がついていて、欄外の27に別訳として「御国の民の生活をしてください」とあります。つまりピリピ人たちは、この地上にあって天国人としての市民生活をするようにと勧められました。彼らはある種の迫害の中に置かれていたようですが、反対者たちに囲まれる中でも、福音にしっかり立つ歩みをするように、と。そしてその生活のためには「一致」が必要であると語られました。この「一致」の問題について、パウロはさらに今日の2章1節からの部分で語ります。彼がこのように力を入れて語るということは、ピリピ教会の中にこの種の問題があったということを示唆しています。パウロを支え、パウロの喜びであったピリピ教会でしたが、だからと言って何の問題もない完璧な教会だったのではなく、パウロに勧められなければならないこうした点も持っていたのです。

さて2章1節は、一致についての勧めの基礎となる部分と言えます。パウロはここで「こういうわけですから」と始めて、もしあなたがたにこれこれのものがあるなら、と4つのことを語っています。その4つとは「キリストにある励まし」「愛の慰め」「御霊の交わり」「愛情とあわれみ」です。果たしてこの4つはどういう関係にあるのでしょうか。ある人は私たちの頭にすっきり整理できるようなある種の分類を試みようとしますが、結論から申し上げますと、それにうまく成功した人はいません。私たちは何とかこの4つを秩序だったものとして理解したいと望みますが、そう読むのは難しいようです。パウロはこの4つの言葉によって組織神学的なことを語ろうとしたというよりは情熱的なアピールをしようとしていたと考えられます。ピリピ人たちの心に訴えかけるように、これらの言葉を重ねたのだと考えられます。まず一つ目は「もしキリストにあって励ましがあるなら」。パウロはここで「もし～があるなら」という表現を4つの言葉にそれぞれ繰り返して使っていますが、これは彼らがそれを持っているかどうか、パウロには確信がなかったということの意味しません。パウロはここに述べることをピリピ人たちが全部体験し、知っていることを確信していました。ただあえて「もし～があなたがたのうちにあるなら」という言い方をすることによって、彼ら自身に本当に自分たちはこ

れらを持っているのかどうか自己吟味させようとしているのです。ですからこれらは彼らがすでに受けている神の恵みであると言えます。一つ目は「もしキリストにあって励ましがあるなら」。彼らはキリストを信じ、キリストに結ばれることによって大きな励ましを受けました。この「励まし」と訳されている言葉は「慰め」とも訳される言葉です。彼らはキリストに結ばれることによって罪の滅びから救われ、将来の栄光に確実に至るという救いを頂きました。ここにとてつもない励ましを受けました。2つ目は「愛の慰めがあるなら」。彼らはキリストを知り、キリストの愛に浴することから来る非常な慰めを受けました。エペソ書に「人知をはるかに超えたキリストの愛を知ることができますように」という御言葉がありますが、まさに人間では測り知ることができないような、どこまでも広く、高く、深いキリストの愛に慰められています。三つ目は「もし御霊の交わりがあるなら」。彼らは今や聖霊を内に宿す者となり、この聖霊を通して豊かにキリストからの恵みを受けています。またこの御霊はすべての信者の内に住んでおられ、その一つの御霊において信者たちは一つの交わりに生かされています。そして4つ目は「愛情とあわれみがあるなら」。最初の「愛情」という言葉は「はらわた」を意味する言葉です。福音書でイエス様が人々をかわいそうに思われたという時に使われている言葉は「内臓が揺れ動く」という意味の言葉ですが、まさにそのようなキリストのはらわた、愛情、そしてあわれみをピリピ人たちは体験し、知っています。パウロはこれらがあなたがたの内にくらかでもあるなら、と言っています。私たちはただ人間的な力で互いに一致するように努力するのではないのです。私たちはキリストにある恵みを体験した者、キリストの愛を知った者、そして新しい心、新しい性質を頂いた者たちです。それを自分は本当に持っているかどうかを吟味し、感謝することによって、頂いたこの特性を発揮してお互いとの一致の歩みに進むようにと勧められています。

さて、このことに基づいて2節では一致に向けてのアピールがなされています。ここにも4つの表現が出て来ます。「一致を保ち」「同じ愛の心を持ち」「心を合わせ」「志を一つにする」。これも私たちはどうにかしてスッキリ配列されているものとして読みたいと願いますが、そううまくはいかないようです。ここでも一つ一つの表現に独自の意味を見ようとするより、いくつかの言葉を並べて情熱のこもったアピールをしようとしていると見る方が適切だと思われます。まず言っているのは「あなたがたは一致を保ち」。直訳では「同じことを考え」。クリスチャンは主にあって、福音において同じ思いを与えられています。その特性をいよいよ発揮するように！ということでしょう。2つ目は「同じ愛の心を持ち」。1節で見たように、ピリピ人たちはキリストの愛を知った者たち

です。その愛情とあわれみを経験した者たちです。そういう者たちとして、同じ愛の心を持つことはできることでしょう。3つ目は「心を合わせ」。これは「ともに」という言葉と「魂」という言葉を組み合わせた言葉です。つまり「魂」と「魂」がともにある状態。ある人の存在の中心である魂と、他の兄弟姉妹の存在の中心である魂とが重なり合うようにするという事です。そして4つ目に「志を一つにして」。これは1節から始まった文章の最後にあって、このアピールをまとめた言葉であると言えます。

果たしてこのビジョンはもう少し具体的には、どのようにしたら実現されるのでしょうか。続く3~4節には、私たち一人一人が取り組むべき課題が示されています。ここに一致のカギがあると言えます。否定的面と肯定的面の両方から語られています。まず否定的面から2つのことが言われています。3節前半：「何事も自己中心や虚栄からすることなく」。「自己中心」には印がついていて、欄外の3を見ると、あるいは「党派心」と記されています(1章17節の「党派心」と同じ言葉)。確かに「自己中心」と「党派心」は同じようなものと言えます。自分を中心に考え、自分のやりたいようにやろうとするから私たちは党派を作ります。もちろん真理において妥協してまでお互いに一致するように！とは聖書では言われていません。大切な真理についての理解が異なるため、どうしても同じ道を歩めないということはあるでしょう。しかしここで問題にされている「党派心」とは、人々とともに歩むことを好まず、自分を主張して、別なグループを作りたいがる私たちの古い性質の事です。自分の好む人とだけ党派を組み、そうでない人たちとは距離を取り、むしろ敵対する。確かにこれは教会の一致と平和を破壊するものでしょう。もう一つの病原菌は「虚栄」です。これは「虚しい栄え」と漢字でも書きますように、実質が伴わない栄光の事です。賞賛に値するものがそこにはないのに、さもそれがあるかのように見栄を張る事です。お互いがそのように自分がさも立派な者であるかのように振る舞い、互いに張り合い、相手と競い合っていたら、確かに互いに心を合わせて一致することは不可能でしょう。

では肯定的な面から私たちは何を心に留めて行けば良いのでしょうか。一致のカギとして私たち一人一人が取り組むべきことは何でしょうか。それは3節の「へりくだり」でしょう。実に人間の罪のエッセンスは高慢であると言えます。創世記3章で最初の人間アダムが犯した罪はまさにこの高慢でした。彼は自分のあるべきところに満足せず神以上に高く上ろうとしました。その結果、あらゆる悲惨の中に落ちてしまいました。それ以後の私たちの悲惨も、すべてこの高慢という罪と関係していると言っても過言では

ないと思います。ですから私たちが本来の祝福の状態に生きたいと願うなら、一人一人が立ち戻るべきはこのへりくだりでしょう。慎み深く自分を考えることです。自分が取るに足りない者であることを良く洞察することです。

その具体的なあり方としてパウロは二つのことを述べています。一つは「互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。」へりくだり・謙遜は、自分をどう見るかに関わりますが、同時にそれは他者をどう見るかに関わることであり、それは「互いに人を自分よりもすぐれた者と思う」というあり方に現れるはずで、人間的な目で見たら、なるほど優れている人、劣っている人、色々でしょうけれども、自分を正しくわきまを知っている人は、どんな人をも見下すことなどできない自分であることを知っています。むしろ周りの人々の内にはたくさんの神の光が輝いていることを認めます。ある分野である人が必ずしも秀でていなくても、他の分野で必ず神によって良き賜物で飾られています。尊敬すべき点はたくさんあります。それを認めて、へりくだって、他者を自分よりもすぐれた者として見ることを学ばなければなりません。

もう一つの具体的な勧めとして4節にこうあります。「自分のことだけではなく、他の人のことも顧みなさい。」私たちはつい自分のことだけを考えやすい者です。他の人のことは考えに入れず、むしろ平気で他の人を傷つけたり、無視したり、自分の幸いのための踏み台にさえしてしまいます。しかし「他の人のことも顧みなさい」と言われています。ある人はここで「他の人のことも」と言われている点に注目して、こう考えます。「これは自分のことを考えてはいけないということではない。他の人のことも顧みなさいと言われているんだから、自分のことを顧みてもいいんだ。むしろ自分のことを顧みることが基本だ。だから私はまず自分のことをしっかり考えよう。そして他の人のことも考えるようにしよう。」こう考えたら非常に意味が弱くなるのではないのでしょうか。もちろん私たちは自分のことを考えていいのです。自分の健康状態について、自分の経済生活について、自分の仕事や学びについて、自分の家族について、自分の将来について、……。こういったことについて自分を顧みるのは当然のことです。しかしパウロが言っていることは、他の人に関することを、その自分の関心から切り離して考えてはならないということです。私たちが自分のことを考えているその視野の中に、周りの他者のことも常に入っているということです。私の視界の中に自分のこととセットで他者の幸せも同じように入っている。つまり「自分を愛するように、あなたの隣人を愛せよ」と同じことであると言えます。他の人に関することも、自分のことと同じよ

うに大事なこととして心配り、顧み、その益のために行動するということです。

パウロはその模範として 5 節でイエス・キリストの姿を指し示します。「あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。」 具体的には次回見る 6 節以降に記されています。そこに「キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を無にして、仕える者の姿を取り、人間と同じようになられました。云々」と記されます。キリストはなぜ天の王座を後にして、クリスマスのこの時、飼葉おけの中に誕生されたのでしょうか。なぜ神である方が地上に来られて、この世で罪人たちの反抗を忍ばれ、低い生涯を歩まれたのでしょうか。そして最後は十字架上でご自分のいのちをささげるところまで進まれたのでしょうか。それは 4 節にあるように、自分のことだけを考えられたのではなかったからです。もし自分のことだけを考えていたなら、キリストは天の栄光にとどまっていれば良かったでしょう。永遠の昔からの父なる神との全き愛の交わりを楽しんでおられれば良かったでしょう。しかしその方がそこを後にし、私たちのいるこの地上まで下って来て下さったのはなぜでしょうか。それはキリストが私たちのことを見つめてくださり、私たちが顧みてくださったからです。「他の人のことも顧みなさい」というこの原則に生きられたからです。私たちはこのキリスト・イエスを知っています。1 節で見たように、キリストにある励ましを知り、愛の慰めを知り、御霊の交わりを知り、愛情とあわれみを知るように導かれた者たちです。そうであるなら、このキリストを感謝し、このキリストに心からの礼拝をささげている者として、私たちもこの方にならう歩みへと進むべきではないでしょうか。未だ残る罪のゆえに、今なお自己中心や虚栄に生きやすい私たちです。そして神が導き入れてくださった一致の交わりを破壊し、信仰者たちの御国の生活を壊してしまいやすい者たちです。しかし私たちは自分が受けた恵みを感謝し、このキリストの姿に導かれて、私たちの歩むべき道へ歩んで行きたい。ここに一致のカギがあります。そしてその一致のあるところに御国の民としての力強い証の生活が導かれるのです。「何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。自分のことだけではなく、他の人のことも顧みなさい。あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。」